

《中国文学批評通史緒論訳注》其五：顧易生・蔣凡 《両漢文学批評史・緒論》（下）

甲斐，勝二
福岡大学人文学部

東，英寿
鹿児島大学教養部

<https://hdl.handle.net/2324/19706>

出版情報：福岡大学人文論叢．28（4），pp.2135-2153，1997-03．福岡大学研究所
バージョン：
権利関係：



《中国文学批評通史緒論訳注》其五

顧易生・蔣凡《両漢文学批評史・緒論》

(下)

甲 斐 勝 二
東 英 寿*

初 め に

前回（本論叢 28-1）に続けて《両漢文学批評史・緒論》（下）をここに訳出する。この部分は蔣凡氏の手になると前書きには記されているが、これが含まれる《先秦両漢文学批評史》の書籍が顧易生氏と共著の形になっているので、両氏の名前を挙げておくことにした。ここに継続して訳出するのは、両漢文学批評史の緒論の後半部分、「四、第二回文論の高潮期」「五、フィナーレと残響」「六、両漢文論の歴史的地位及び影響」の三節、主に前漢末から後漢末にかけての記載部分である。

先秦時代の諸子が示した文論の多様性と、魏晋時代以降に発展する自覚的な文論との間において、この漢代の文論については儒家一尊の強い教学指導の下、暗黒の時代と見られがちな従来の視点に対して、蔣凡氏は諸子からの継続性を示し、また魏晋へと発展継承される流れを示そうとこの書で努力されたと言う。その努力はかなり成功しているのではないかと訳者には思われる。とりわけ視点をぶらさず、特に屈原の《楚辞》・司馬遷の《史

*鹿兒島大学助教授

時間を経た後、またもや突然魏晉南北朝の文学の自覚と発展の新しい夜明けを迎えるということになるが、この視点では物事の発展の法則に符合しない。本書の両漢編では特に思想文化運動の客観的史実から出発して、「断裂」という旧説を努めて矯正し、漢代の文論がその独特の形態で順次進展し、段階を分けて発展し、ついには歴史の使命に背かず、先秦から魏晉南北朝へと向かう過渡期の役割を果たした事を明らかにする。文学の自覚の種は既に両漢に胚胎されていたのであり、漢代の人びとはまことに文学批評の新たな高潮期を導く源流を開いたのである。我々は、先秦両漢の文学論の史料を考察するときに、その基本的な意味を理解することに努め、時代および論者の哲理などの思潮と有機的な関連付けを試み、彼らの歴史的地位とその深長さを示して、各々の段階の文学批評の特徴と精神的風貌を全面的に描き出そうと考えたのである。”

翻訳の文章が時には激しい調子になることがあるのは、もちろん蔣氏のスタイルでもあらうが、引用文に見えるように、両漢時代を文学論の歴史では空白期だと位置づけたかつての視点を矯正しようとする意気込みのためだと思われる。

この、両漢文学批評史の緒論部分は、原書で三十頁、翻訳すると相当な分量になるので、掲載の都合上半分に分け、《上》には、《一 資料範囲の拡大と文学観念の進歩・二 思想文化と社会の歴史的背景・三 初めての文学論の高まり》の三節を訳出し、参考資料として簡単な年表をつけた。但し個人の生卒年に関しては正確な年代という保証は小なく、大体の所と考えていただきたい。《下》には《四 第二回目の文学論の高まり・五 結末と反響》の二節と簡単な資料を付録につける予定である。また、些か書評めいたものがあれば、下篇でまとめてさせていただくことにする。

例によって、注釈は本論中の著者の視点に基づいてつけている。その中で訳者として気づいたところ、問題として指摘すべきと考えたところがあれば、「訳者」の名を付して区別する。翻訳の中に頻出する「文論」の語は、いわゆる「文学論」「文学批評」「文学批評理論」などを総括して呼ぶものだと理解されたい。翻訳ではなるべく簡明な日本語での翻訳に心がけられけれども、訳しすぎや翻訳者の理解不足による不明快な訳文など、読者ばかりでなく著者にも迷惑をおかけする箇所も多いかと恐れている。御指正をお待ちします。

末筆ながら、翻訳を快諾された蔣凡先生にお礼を申し上げます。

①《先秦文学批評史・緒論》の訳は福岡大学人文論叢第27巻第4号平成8年3月に掲載。

この書で示される以上のものとなっているかもしれない。

第三に、復古の問題における文芸用語の問題について。本書では揚雄が文章作成に古語の使用を主張し、王充は口語を使うことを主張した事が示されている。最近の研究では、少なくとも漢代の初期においては辞賦は朗詠に耐えられる口語で作られていたらしく、それが文章化するのには揚雄の頃ではないかとの推測がある(賦に難解な字が多いのはなぜか— 釜谷武志『日本中国学会報第48集』1996)。そうだとすると、揚雄と王充の議論は、辞賦の制作の流れが口語による朗誦性を持ったものから文字による文章化へと進んで来たときに起こったものだと見ることができよう。ならば、このような議論が当時に必然的に起ることが知れ、この議論の結末にいたる流れ、つまり口語性保持の主張は復古派になぜ敗北していったのか、或いは敗北していなかったとすればどこを流れて行き、晋代の葛洪の口語重視にはどうつながるのか、と言う文学史的な問題に興味が湧いてくる。

最後に、《楚辞》を王逸が経学で解釈する態度について。実は《詩経》でも事態は同様なのだが、本書で《楚辞》について指摘されるような経学に文学作品を結びつけてその存在意義を主張する態度は、中国文学批評史上しばしば見られることである。そこに、経学の根強さを感じるとともに、現代にも通じる中国的な思考様式を感じてしまう。確かに、ある事象の存在意義を世に主張するときには、その時代の所謂誰もが信じた部分を基礎とし、そこに如何に結びつけるかと言った視点から説かれるのが一般的な主張法であろう。しかし、逆から見れば、その時代の主流的思想基盤に取り込まれる事によってその位置づけを得たことにもなるわけだ。《楚辞》や《楚辞》が代表した文学にとってそれが幸いであつたかどうか、なお考えてみたい問題である。

以上のことは、すでに研究済みなのかも知れないし、また問題の建て方が間違っているのかも知れない。本書を詳細に読めばわかることも多く、恐らく訳者の不勉強を示したばかりであろう。ご教示を待つ次第です。

さて、いつもながらの拙訳で、誤訳も多く注釈も不十分であることを懼れている。例によって、注釈は原書に極力従った。ご批判、ご指正をお待ちすると共に、翻訳の許可をいただいた蒋凡氏にお礼を申し上げます。

《両漢文学批評史・緒論》（下）

第四 第二次文論の高潮

前漢と後漢の交代期に、文学に関する議論はその第二次高潮期が形成された。この時期の文論の主な代表的人物には、前漢末に劉向（BC 77-6）と揚雄（BC 53-AD 18）がおり、後漢の初めには桓譚（生没年未詳）と王充（AD 27-97）及び班固（AD 32-92）がいる。前漢武帝期前期の思想界の転換移行の状況とは異なり、この時期の儒家思想はすでに「一尊に定ま」って正統となり、乱世ではあったけれども、揺るがぬ地位を占めていた。よって、そこで受けた教育及びその基本思想の傾向から見るならば、彼らは共に儒家の範疇に入っている。とはいえ、これは文論上の以前の争いが彼らには影響を与えていない、と言うことではない^①。その後の文論における後漢後期の争いは特殊な方式で続けられ、それが主に儒家の内部で展開しているというのが事実なのである。劉向と班固は、より堅固な儒家の立場に立ち、理論もかなり正統的なものであった。しかし、桓譚と王充は確かに経書をしっかり勉強はしているものの、細かな字句解釈の学を好まず、その大義に通じる訓釈を行うのみで、しかも思想は硬直したものではない。彼らは疑問と反省を好み、しばしば「俗儒」を批判した。このため、彼らには伝統的な文論とは明らかに距離を置く一面があった。これに対して揚雄は、その矛盾に満ちた主張のため、文論の高潮期にあっては過渡的な意味を持つ重要な人物となっている。もちろん、それぞれの文論には互いに優劣があって、一概には論じることは難しい。

この時期に、劉向と班固を代表とする伝統的な文論は、儒学「獨尊」以後の理論的な雰囲気や形態を映し出しているのが概ねの所である。前漢末の混乱した世の中では、劉向たちは儒学によってその危機・衰亡を救い社会を改造しようと企てたが、後漢の初期の讖緯儒学による統治情況に至ると、班固は儒学をもって封建統治を堅めようとする理論的な武器とした^②。それはもっともなことだろう。しかし、当時の儒家の伝統的文論には、復古的保守的な一面を持ちつつもその一方では進歩的な要素が含まれていた。儒家思想の発展史にあって、儒家の内部には矛盾と諍いが満ちていたのである。当時の封建的文人達の胸臆は依然としてそれほど狭いものではなく、様々な方面からの摂取と、異なるものとの共存を許すことができたのである。たとえ自分では正統であると考えていた劉向・揚雄・班

固などの人物であっても、前後《漢書》本伝の記載によると、共に老莊思想の影響を受けたことがあり、また諸子百家の栄養を広く吸収している③。これは後の「俗儒」がその足下に及ぶこともできないほどだ。このため、彼らは前漢前期の儒家文論を継承したばかりでなく、発展もさせたのである。前漢前期の《淮南子》及び司馬遷の文論に対しては、批判もあれば、摂取継承もあることになり、複雑に入り組んだ姿を現すことになったのだった。

劉向と班固は以前の儒者の教化中心説を継承した。彼らは、文章が「經典の義に明らかに合致する」(劉向《管子書録》)ことをその目的とし、著作は「その君を忠義によって諫めることで、その文章は見るべき価値を持ち」、「それで六經の義に適合する」(劉向《晏子叙録》)と語っている④。詩賦を論じては、「風論に通じ」、「忠孝を尽くして」、それが「《詩經》雅頌に次ぐもの」(班固《兩都賦序》)であることを求めている。これは《毛詩序》の美刺風論理論と轍を同じくするものだ。当然ながら、儒家經学の内部の今文古文の両学派による争いから考えれば、劉向は今文家であったので、彼の美刺「謹告」の説は、董仲舒の影響によるところが大きかった。班固の場合は古文学派に傾いていたので、《毛詩序》と《樂記》の影響によるところが大きかったのである。しかしながら、このような違いは理論の主旨とは関係がなかった。彼らは同様に前儒の「詩言志」説を発展させていたのである。とはいえ、劉向は「言志」の概念範囲を拡大させ、「詩を作って示すところを明らかにする」(《列女伝》卷一《齊女伝母》)、「詩を作って意味するところを明らかにする」(《列女伝》卷四《召南申女》)という主張を提出した。詩歌が特殊な「言」であり、「胸臆を開いてその心情を表出する」(《説苑・尊賢》)ためのものだと考えた⑤。これこそ詩歌文学が諸種の情感に訴えかける特徴を補足説明するものである。それだけではなく、劉向は更に進んで《淮南子》の「心中に憤り外面に表出する」説、及び司馬遷の「発憤して書を著す」説の影響を受けて、「詩言志」説の不足を補った。彼は「詩というものは、生じた思いが堆積し、その堆積が満杯になり、満杯になった後に表出されるものだ」(《説苑・貴徳》)と言う。彼はしかもこの理論によって屈原及びその辞賦の創作状況を具体的に分析している。屈原は「志が鬱屈して解放し難かった」ので、「《離騷》を詠じて気持ち奮い立たせようとしたのだ」(《九嘆》)と劉向は考えた。特に文学と現実との関係問題に関する場合、《漢書・藝文志》の理論はいっそう面白いものとなる。劉向は、詩歌の作られ方を「喜怒哀楽の心が感じて、歌詠の声が発する」ものとし、漢代樂府民歌の起りを「喜怒哀楽に心が感じ、出来事に関係して発せられたものだ」と見なすのである。

つまり、文学作品が表出するのは内心の真実の情感であり、それは現実生活を正しく反映するものだと言うのだ。よって、作者は更に歩を進めて文学には「風俗を觀て、得失を知り、自ずから正しさを考える」重大な社会的作用があるのだと言うに至る。《漢書・藝文志》は、班固が劉向《別錄》、劉歆《七略》の基礎の上に手を加えて作ったものだから、そこには集體的な知恵が表れていて、儒家の共同認識と理論水準が示されている⑥。この《漢書・藝文志》には更に《詩賦略》が設けられている。このことは、文学創作の繁栄が、文論家の重視するところとなり、詩賦などの文学作品を六經・諸子などの學術的著作とは区分して論述を始めたことを物語る。自覚的にあるいは自覺せずに文学芸術の特徴に対する認識と研究を強化することになったのである。その他に、芸術風格の形成について、班固は地理環境・社会の「風氣」・土俗民情・伝統文化の影響と関連があると考えている（《漢書・地理志》参照）⑦。これらの理論認識は共に前人を越えたものであった。

前後漢の端境期には、屈原の楚《騷》、司馬遷の《史記》、及び当時の辞賦をめぐる三つの大きな問題について、批評と討論が具体的に進められている。これらの問題について、揚雄の文論には矛盾が多い。彼はしばしば共感と肯定をし、賛美することもあるのだが、時にはまた「經典によって大義を立て」て、批判或いは否定もするのである。彼は屈原に対して、「その文辞を見て悲しんだ」ことがあり（《漢書・揚雄伝》）、その芸術上の達成度が司馬相如の賦を越えたものだと考えている（《文選・謝靈運伝論》李善注に引く《法言》）。しかし、彼はまた儒家の「明哲保身」の伝統觀念から出発することで、屈原の投身自殺による抵抗を不満とし、それを理由としてその作品を批判したのである。《史記》に対して、彼は司馬遷が「良史の才」であることを説き、《史記》が「明快で飾りが無く、質実だが田舎びてはいない」芸術的な光彩と、その「実録」的な創作精神をほめ（班固《漢書・司馬遷伝》参照）、さらに「聖人も参考にするであろう」（《法言・吾子》）と言うけれども、その一方では、《史記》が「聖人に随わず、是非判断も經典と違う」（《漢書・揚雄伝》）と非難するのだ。当時の辞賦の創作状況に関係しては、彼は若い頃に努めて修行し、それによって仕官もしたが、晩年には逆に辞賦を激しく攻撃し、「細かなことに工夫を凝らすだけで、まともな人物が作るものではない」と責めつけた（《法言・吾子》）。このような見方は、漢代の後半期に、場合によってはそれ以上の長い間影響を与え続けたのである。後世の人々は自分の考えとその必要性に基づき、各自各様勝手に揚雄の説をつみとり利用したのだった。屈原と司馬遷の問題については、班固は「經に依りて義を立てる」視点に立ち、比較的保守的な立場から揚雄への批判的意見を発展させている。しかし、

当時の辞賦の創作問題に対しては、揚雄が若年時代に持った諷諫勸諭の説を継承して、揚雄晩年の意見については否定するようだ(《兩都賦序》参照)⑧。当時の文学を支持・肯定する点では、班固は揚雄よりも上である。しかし、揚雄には別に「《詩經》系の詩人の賦は美しく随うべきであるが、楚辞の影響を受けた辞人の賦は美しくても度が過ぎる」(《法言・吾子》)という主張があることには注意しなければならない。「随うべき」とか「度が過ぎる」等は、確かに儒家の標準で計られたものである。けれども、もしもこれに拘泥しすぎず、またこれをうまく導くことができれば、悪しき文風を正し、文学創作の健康な発展を促して、積極的な作用を起こしえたはずである。この点で、班固の及ぶところではなかった。

思想領域では、揚雄は「自分が孟子のつもりで」おり(《法言・吾子》)、孔子・孟子の道統の継承者を自ら任じていたようである。よって、揚雄は儒学系の荀子と董仲舒等の人物を継承し、明道・徵聖・宗經三位一体の儒家伝統文学観(《法言》参照)を確立したのである⑩。そこには新しさは無いとはいえ、その影響は大きく、明らかに復古保守の傾向を帯びている。しかし、実際のところ揚雄は純粋な儒者ではない。彼が明らかにした「道」については、老莊の自然無為の道に基づいて、「道は、通である。通じないところはないからだ。・・・私は天に無為の為を見るのだ」(《法言・問道》)と言っている。よって、また「偉大なる文は規範がない」(《太玄・至昆》)とも言うのである。本当に価値があり意義のあるものが道の「偉大なる文」を体現するのであり、そこには何らの規範となるモデルやガチガチに制限を加えるものは無いのだ。この点で、揚雄は《淮南子》の影響を実際に受けており、そこから更に水準を上げ、本体論の高みから研究を進めて自然に出来る文章を強調した。そこには文学が伝統的な類型を打ち破るために有益で新しい試みがあったのである。これも又揚雄が後人を啓発した大きな理論的な貢献であった。

後漢の文論になると、賛成か反対かに拘わらず、共に揚雄の理論から強い影響を受けている。班固が主にその伝統的な観念を継承したのとは違い、桓譚と王充の場合は揚雄の懷疑と思索の面を発展させた。その上彼らの批判精神は、後から来た者が上位に座するというものになっている。その文論の基本的傾向においては、桓譚と王充は共に儒家理論系統に属す。桓譚は、著作・文章とは社会を「興し治める」ためのものであり、《春秋》の「褒貶」と異ならないと考えている(《新論・本造》)⑪。しかし、王充は儒家の「質実を重んじ」、「有用を尊ぶ」伝統的な文学観念に基づき、「虚妄を嫌う」ことによって「誠実」を果たし、「華麗にすぎ嘘偽り」であることを排斥して、「真美」を求める理論的な主張を

掲げた。著作・文章は「かりそめに文辞を調え飾って、すばらしい出来映えに仕上げるものではない。その根本は皆人間社会の非に起源する。故にとことん考えて、世俗を責めるのである」と考えた（《論衡・對策篇》）。これは現実の闘争ための必要性から発せられたものである。この方面では、彼らは相変わらず先秦以来の広範な雑文学観念を持ち続けたのであった。特に王充の場合は、思想の著作の面から文章を必要としていたため、文学の芸術的な特徴に対する研究に関しては些か粗略となっており、理論の発展も少なかった。王充が誇張を論じる時には、事実に拘泥し、無理矢理こじつけるのが常であって、これは彼が芸術想像及び創作的思惟に対する認識を欠いていたことを物語る^⑫。しかし、彼らの主な理論的貢献は、伝統儒家の復古的保守的文学観への懐疑と批判によって、創造性を持った以下の新しい視点を出したところにあったのである。

まず、復古に反対して新しい創作を主張した点において。揚雄は「基づいてこそ、革めることができる」（《太玄・玄瑩》）と言って、儒家の《詩》・《書》などの經典が「その時に応じて作られたものであって、損益も分かるというものだ」（《法言・問神》）と考えた。これは復古によって革新しようとする意見である。前漢前期の儒家に較べてこれは水準が高いものではあるが、態度は些か曖昧である。桓譚と王充の場合は態度明快・旗幟鮮明で、揚雄のようなあやふやな態度はまったくない。桓譚は「事毎に古にならう」（《新論・言体》）のに反対し、「先の聖人や後の聖人を、必ずしも継承する必要はなく」、各位の「伝統からはずれた論、主流とは異なった文」が、「共に善きものであり見るべき価値があるものだ」（《新論・正経》）と考えたのである。文芸進化論の指導の下、桓譚は鄭衛の新声を好み、雅頌の古調を嫌ったのだ。彼はこのために揚雄と宋弘の批判を受けることになる（《新論・雜事》及び《後漢書・宋弘伝》）^⑬。この事はちょうど反対側から桓譚の反復古の文芸思想を見ることになり、經学の下に従属していた儒家伝統文論モデルに衝撃を与えるものだった。王充となると俗儒の「先生ばかりを信じて古を正しいものとし、聖賢の言葉はみな間違いなし」（《論衡・問孔篇》）という盲目性に対して、猛烈な批判をはっきりと展開した。彼は「古を尊敬し、今を卑しむ」、「遠きを褒めて古を称える」（《論衡・須頌篇》）ことは俗儒が皆持つ欠点であり、だからこそ「現代の文は古書には及ばない」（《論衡・案書篇》）と言うのだと考えた。彼は、文を論じる時には「善悪」や「是非」を標準とすべきであり、「古」に適合するかどうかを標準とすることはできないと指摘する。進化の点からみれば、王充は現在が過去に勝るという文学発展観をはっきりと述べたことになる。これによって、彼はさらに模擬に反対し、新しさを作り出すことを貴しとする理論を出し

た。彼は次のように言う「姿を飾って無理に古人に類似させようとすればその本来の形がなくなってしまう、言葉を調整して意図的に古人の心情に近い物にしようとすれば本来の心情を失うものだ」と。文章を著そうとするものは、「それぞれ自前の才能で、善いものを造る」べきなのである。或者は「文章は前人のものに随わねばならない」それでこそ善いものと称されるのだと断言するかも知れないが、王充はこれに反論して、それでは「古の皇帝堯には八つの彩りの眉があるので次の皇帝の舜の眉も八つの彩りにし、舜には瞳が二つあったので、舜の次の皇帝の禹の目にも瞳を二つ描け、と言うようなものだ」と誹っている(《論衡・自紀篇》)。

第二に、情を述べ志を言う事及び文芸と現実の関係の問題になると、桓譚が司馬遷の「発憤して書を著す」説を継承して発展させている。彼は、「賈宜は左遷され志を失わなければ、あれほどの文彩は生まれなかった・・・揚雄は貧乏でなければ、《太玄》《法言》を作ることはできなかった」と言って、著作者が現実の圧迫に直面することで、創作の激情を奮い立たせ、不朽の作品を書き上げることを望んでいる。しかし、桓譚はまた付け加えて「淮南王は位貴く金持ちでなければ、広く俊英の士を招いて書籍は著せなかったろうし、司馬遷は記録を司らねば、古今に通曉することもできなかった」(《新論・王霸》)と言う。作家の主観的な能動性をうまく発揮さえすれば、客観環境のすべての有利な条件を十分に利用して創作に従事できるというのである。このように創作における主観的客観的条件を認識した事は、「発憤して書を著す」説に対して有益な補充と発展であったのだ。王充となると、司馬遷が古の《詩》は「聖賢が発憤して作ったもの」と述べた後に、更に歩を進めて「《詩》は民間に起こる」(《論衡・対策篇》)という視点を出した。文章著作は「鏡を開くよう」(《論衡・自紀篇》)なもの、つまり民間の生活をその中に含んだ現実を真実のままに映しだす鏡でなければならないものだと考えたのである。これは經学統治の時代であって、明道、徵聖、宗經の伝統的な文学観とは異なり、確かに人々を驚かせるものであった。

第三に、古語をもって現代語に代えようとする復古思潮に対して、王充は文章著作は口語を重視すべき事を提唱した。「言って志を明らかにする」事を達成し、しかもその内容を晦渋にしないためには、「文字と言葉の方向を同じくする」(《論衡・自紀篇》)事に努めねばならないのである。彼が分析して言うには、古代の經典の言語文字が解りにくいのには、聖人が意図的に「覆い隠して典雅にした」のではなく、「古今の言語が違い、彼方こちらでは会話が異なった」(同前)ためなのである。つまりは、時間の隔たりと地域的な

隔たりが作り上げたものなのだ。この分析は基本的に事実と合致していて、揚雄の「経を宗ぶ」ことによって引き出された「文は必ずや晦渋で深遠であれ」の論に強く反発するものであった^⑭。これは後世の文学の言語の健康的な発展に、有益な作用を及ぼしている。もし、揚雄の「文は必ず晦渋で深遠であれ」の論を、言葉の実際から乖離した文字型文学の理論的要求に対応したものと言うならば、王充の主張した言・文一致の文学言語観は、口語型文学の発展への要求に沿ったものであり、創造性を豊かに持つ理論的な貢献である。

第四に、「小説」観の面では、桓譚が前人を越えて、新しい貢献をしている。漢武帝以後の時代、小説創作では豊かな稔りを取り、《漢書・藝文志》の記載では、小説は約千巻の多さに上った。しかし、伝統観念の枠組みのおかげで、人々は「稗官小説」等に対して蔑視の態度をとっていた。劉向・劉歆（?-23）父子は進歩的ではあったので、《山海経》及びその他の寓言故事などの作品についていくらかの議論はしていた。例えば劉向《別録》では次のように言っている「人の姓名を架空に作り、彼らに互いに語り合わせる事、これはその人に言葉を託するのである。だから《莊子》には《寓言篇》があるのだ。」（司馬貞《史記索引》参照）と。しかし、大体の所、劉向父子はやはり儒家の伝統観念で「小説」を評価し、「その事柄が明らかに信じられる」という真実追求の基準で、《山海経》などの作品を評定している（劉歆《上山海経表》参照）^⑮。これは経学家の視点である。桓譚の場合は「短書（漢人の古代「小説」に対する流行の呼称）は、無用なものだ」と言う伝統的な偏見に反発して、その「でたらめ」の中から「その善を採択」（《新論・本造》）するべきだと考えた。《文選・李都尉陵詩》李善注引《新論》では、「小説家は、断片断片の話を寄せ集め、身近な比喻を使って、短書を作った。身を修め家を調えるために、役に立つ言葉がある」と言う。これは「小説」の「身近に比喻を取る」形象化の芸術手法に、「身を修め家を調える」社会的な作用があって、なおざりにすべきでないことを物語るものだ。このような意見は、まだ教化中心説の拘束から抜け出していないとは言うものの、しかし無意識に儒家經典の壟断を打破るもので、《莊子》の寓言などの類の「小説」の生存と発展の為に、理論的根拠を提供したのである。これは、中国の封建社会前期においては、非常に貴重なことであった^⑯。

その他に、具体的な文学批評の面では、桓譚と王充が屈原と司馬遷に対して称賛と肯定的評価を与えている。これは揚雄や班固とは異なるところである。当時の辞賦については、王充の理論は矛盾する。彼は一方では伝統的な観念から出発した。揚雄の見解を継承して、辞賦の風論美刺の社会効能から出発して、司馬相如と揚雄の賦が「是非を分かつず」、「質

実を貴ぶ教化には役に立たない」（《論衡・定賢篇》）と批判したのである。他方ではまた復古反対、現代重視の立場に立ち、班固などの当代の作家が、「その賦は屈原や賈誼のようで」、「文辞はきらめき」、「その美は第一である」（《論衡・案書篇》）と考えるのだった。この当代文学に対する積極的な肯定、熱心な支持の態度は非常に貴重なものである。以上述べたことからすると、この時期の儒家の文論は、經学の影を蒙ることは避けられなかったとはいえ、しかし学術的議論の中であって、以前からの発展を継続していたし、新しい高潮期をも迎えたのであった。

五 フィナーレと残響

兩漢文論のフィナーレと残響を具体的に言うならば、主に後漢中後期の王逸と鄭玄の理論を指すことになる。後漢中期以後、統治は日増しに暗黒化し腐敗していった。社会は日々に混乱に向かい、農民一揆が遂に東漢王朝の葬式の鐘を鳴らしたのである。統治の維持と保護のために、讖緯説と結合して神学化した儒家經学は、大いに提唱はされたが、却ってその保守性と反動性を露にしたのであった。この種の墮落し尽くして神学化した經学を、学術化した儒家經学と較べるならば、神学化した經学は奇形的な変異であり、また変質であるということもできる。それは儒家經典の原義に合致するかどうかを評価の基準とするのではなく、王朝の延命の為に鬼神や天命を騙るものなのであった。實際上、お上の儒学は衰落に向かっていた。《後漢書・儒林列伝》の記載によると、安帝時代（106-125）以後「博士は片隅に座って講義をせず、生徒は横の友達ばかりを向いて怠け、学校はつぶれ、野菜畑となり、ついには牧童や柴刈りの子どもがそこで薪をかるほどになってしまった。」よって、統治者は哀嘆して、「儒者の気風はもはや衰えてしまったようだ」と言ったのであった。儒学の衰微と没落は、社会批判の思潮の発生を促した。師匠の教えを遵守し、家法を厳格に守る伝統的儒家經学とは違って、後漢後期の思想と与論には、「庶民が憤懣を訴え、在野の知識人が勝手な議論を起こす」（《後漢書・党錮列伝》）騒動が現れ始めたのである。この時期に湧きでてきた著名な儒家は、その多くが今文・古文の学を融合し、幾つかの家法の学を兼ね備えいたために、過去を総括し、未来を導くのに都合がよかった。これは、魏晉以後に經学的判断基準を打ち破る事に対する潜在的な促進力と啓発力となったのだ。王逸（生卒年不詳）と鄭玄（A.D. 127-200）の文論は、このような社会思潮の中で生まれ出たものである。彼らには理論的高揚を新しく巻き起こす力はなかったが、しかし、兩

漢文論のために響きわたるフィナーレとその残響を遺したのであった。

周代の《詩》と《楚辞》は中国古代文学の二大源流である。王逸と鄭玄の文論はこの二大源流をめぐって展開した。漢代の末年、旧来の師承と家学の学問の壁を突破して、今古文を真に融合し、幾つかの家法を兼ね通じたのは鄭玄である。鄭玄は主に《詩》を解釈し、理解し、発展させるという側面から自己の理論の組織網を広げたのであったが、王逸の場合は一人の文人学者として、主に《楚辞》を解釈し、理解し発展させるという角度から自己の理論の構築に努めたのである。しかしながら、王逸であろうと鄭玄であろうと、彼らの文論は共に「經典に依って義を立てる」という伝統的な枠組みから抜け出すことはできなかったのである。

漢代文学は楚文化の影響を強く受け、それ故に、屈原及びその作品に関して熱心な検討が加えられた。これは具体的な作品の文学評価の問題に関係するばかりではなく、さらに漢代の人々が文学の本質及びその芸術特徴への理解の仕方にまで関わってくる。漢代初めの賈誼から劉安・司馬遷にいたるまで、その所属学派は必ずしも同じではないけれども、思想が比較的解放的であったがために、《楚辞》の不思議な構想・壮麗な美文を深く味わうことができ、その作品に対してかなり高い芸術的評価を与えている。と同時に、その評価によって各自の理論的な考え方を示したのである。しかし、前漢・後漢の交替期まで来ると、儒学が一尊の位置を占め、經学の文論に対する束縛が大きくなった。揚雄や班固などの人々は、「經典に依って義を立てる」という立場から出発し、屈原の人柄及びその作品に誤った批判を出してしまい、文学及びその理論の健康的な発展に対する障害となったのである。王逸はこれに立ち向かったのだった。王逸は《楚辞章句》の各序文の中で、積極的に世間と関わる儒家思想を継承し、劉安及び司馬遷の観点を大いに発揚すると共に、更に理論化、系統化を進め、それによって漢代の屈原及びその作品に関する議論のために、理論的な総括をしている。王逸は「人を知って世を論じる」という原則から出発して、屈原が受けた社会環境の圧迫から、その創作を論じた。「屈原は忠臣たろうとして言いがかりを付けられ、深く悲しみ愁いに沈み、ひたすら《詩》人の義に依って、《離騷》を作り、上はそれによって諷諫し、下はそれで自分を慰めもしたのだ」（《楚辞章句序》）と考えたのである。經学統治の時代には、いわゆる「ひたすら《詩》人の義による」というのは最高の評価である。王逸は屈原作品の社会作用を論じ、伝統的文論の「諷諫」の説を継承すると共に、その一方ではまた司馬遷の「発憤著書」の論を発展させた。屈原はその内部に「憤懣を我慢できない」ほどの怨みがあったので、社会の圧迫に立ち向かうために憤りを

発し心情を吐露して《離騷》の諸篇を作り、それで「自分を慰め」、心情のバランスを取ろうとしたのである。王逸の見るところでは、作家が内心のバランスを保とうとして発憤して情をのべる事と、君主を諷諫することは一緒にできることなのであった。よって、王逸は《九章・惜誦》の注の中で、本文を解釈して「自分の体は疲れ病むが、それでも憤りを発して此の辞賦を作り、利害を並べて、自分の心の鬱屈を洗い流し、君主を諷諫するのである」と言う。揚雄や班固等の人々の批判に対しては、屈原の頑強な戦いの日々から出発して、熱心に作家の愛国精神を褒め上げ、更に歩を進めて「《詩》人は主君を怨む主上を刺ったのだ」ともちあげた。これは時代の要求と結びつき、また孔子の「詩は以て怨むべし」の説に対する自己の理解とその発展を打ちだすものであった。これが当時の「経に依って義を立てる」説の付属物であることは逃れられないとしても、しかしその中ではある種の新しさが胚胎され、非常に個性的な理論である。漢儒の「溫柔敦厚」の穏やかな《詩経》解釈に対しても、これは婉曲な批判或いは改造を加えるものであったのである。さて、芸術的な方法の面から見ると、王逸が提唱した屈原の辞賦の香草美人の比興手法は、肯定するべき所もあるとはいえ、牽強附会という問題点がある^⑰。王逸は「《離騷》の文は、五経に依託して義を立てた」のだと考えていたからであった(《楚辞章句序》)。しかし、全体的に見れば、《詩》《書》などの中原文化とは異なる楚文化の理想主義とロマン的雰囲気に対して、それを理解しその美を評価する態度を示している。王逸の《遠遊序》は屈原の作品を評価して、「文彩は秀でて、見事な構想を巧みに表現し、仙人に従って、共に遊び、天地をめぐり、いかなるところへも行ったが、それでも楚国の事を気にかけ、旧友を思いやる」と言う。彼が褒め称える「天地をめぐる」芸術の「見事な構想」とは、ロマン的な想像と幻想であるものの、しかし「旧友を思いやる」現実的な基礎の上に立脚するものでもあることが分かる。このように抒情の角度から古典ロマン的な芸術の創作を提唱することは、經学が指導する伝統文論の理性的な視点に対して、それを継承し発展させるものでもあり、同時にまたそれに対する批判と衝撃になるものでもあった。王逸は、屈原及びその作品の批評と研究において、辞賦を代表とする漢代の人々の純文学への認識の向上と進歩を反映させたのだった。

王逸のやや後になる鄭玄は、中原文化の薰陶をかなり強く受けている。彼は多分に儒家の理性的視点と現実精神によって《詩》を解釈し注釈して、文学研究に従事した。彼は、周の《詩》を研究し、《毛詩序》の影響を受けて、詩歌の風刺教化を大いに提唱した。詩歌の「六義」と「正・變」を検討して、一家の言を為すに至ったのである^⑱。貴重なのは、

彼は様々なものを受け入れて、一つの流派にこだわらなかったことだ。前人の成果を広く吸収した基礎の上に、体系性をかなり持った理論的な総括を作り出すことに力を注いだのである。その《詩譜序》に言う「源流の清濁の部分を知ろうとすれば、その上下の流れに沿って考えよ、そこから来る風が芳しいか臭いかを知ろうとすれば、そばに行って観察せよ。これが詩研究の大綱である。一本の綱を張れば、すべての編み目が張られ、一篇を理解すれば、すべての篇が明らかになる」(《詩譜序》)と。ここでは通時的な歴史発展(「その上下に沿って考える」)から、共時的な社会関係(「そばに行って観察する」)まで及ばぬ所はない。高く遠くを見渡して自己の文論の綱領を打ち立てたという自覚的な意識が顕れているのだ。これは魏晋南北朝以後の体系的文論及びその理論の自覚に対して啓発を与えるものであった。この他に彼は《詩譜序》の中で「詩の興り」の問題も研究し、文学の起源問題に対して自分の見解を極力作りだそうとしている。彼は《尚書》の中の片言から詩歌の源流は太古の虞舜時代であると断言したけれども、これは明らかに科学的ではない。しかし、別の角度から見ると、このように努力して文学の本源を探ろうとすることは、後人が文学の本源論に対して研究を進める励みになったし、それによって文学研究は理論的思弁性の方向に発展するよう押し動かされたのである^⑨。これは魏晋南北朝以後の文論の理論的思弁性の発展に対しても、当然ながら一種の先導をなしたものであった。

六 両漢文論の歴史的地位及び影響

前述のように、我が国の古代文学理論批評の発展史にあって、両漢文論は先秦文論という初期段階から、魏晋南北朝文論の自覚段階までに至る当然の連絡通過の部分である。この期間は、儒家経學の思想統治のために、両漢伝統文論の多くは「経によって義を立てる」ものであり、思想的な付属物の地位を抜け出すことはできなかった。《毛詩序》或いは鄭玄の《詩譜序》であっても、詩歌専門の論篇であり、理論的な色彩に富んではいたものの、やはり儒家の経義を解釈したときの産物であったのだ。理論上、儒家はその理性的な視点と現実精神で、教化を中心とする伝統的な文学観を打ち立てたが、その重点は文学と政治、文学と倫理、文学と現実などの外部規律の研究にあり、文学の芸術的な特徴などの内部規律の研究には無かったのである。加えて儒者固有の復古保守の傾向が、両漢伝統文論に明らかな局限性を与えた。漢儒は先秦の儒家の意見を継承し発展させて、道を明らかにし、

聖人に規範を取り、經典を基準とする三位一体の伝統的文学観を固め、千余年続く封建的な文論の動かざる類型となした。さらに、その世にも稀な安定性によって、復古及び保守の精神を表明して何千年にも渉る封建文学の健康な発展を邪魔したのである。しかし、漢代は封建社会の上昇期にあったため、儒学は正統思想を奪い取る戦いの中で、時代の潮流に適合したこともあり、幾種かの進歩的な要素を示し、伝統的な文論に対してもかなり好ましい影響を生んでいる。例えば《案記》には、心と事物との感応に関する「物感」説があり、文芸の本源を探っている^{②⑩}。《毛詩序》の「六義」説は、風雅・比興と美刺風論を提唱し、中国古典現実主義文学及びその理論への批評の出現に対して積極的な作用を果たしている。また鄭玄が体系的な詩論の綱領を打ち立てようとしたような自覚的な要求は、魏晉南北朝以後の文論の自覚に対しても有益な啓発を与えた。しかも、前漢前期は思想が比較的自由で解放された時代である。思想運動の歴史的慣性作用によって、儒教の統一旗の下でも、両漢の文論の議論は複雑で熱気漂う状況を呈し、さらに、二度の高潮期を巻き起こし、その最後には響きわたるフィナーレが加えられた。その間、道家思想を主として百家の学を兼ね備えた劉安が、外部から儒家の伝統的文論に猛烈な攻撃を加えたばかりでなく、儒家内部からも多くの人々が伝統的文論に対して懷疑と批判を提出してきたのだった。異なる理論の論争は、異なる音調を形作る。彼らは共に排斥しながらも成長を促し合い、異なった面から共同して両漢文論の大いなる時代の楽章を充実させ、豊かにし、発展させたのである。劉安・司馬遷そして王逸は屈原とその作品に対して高い美学的な評価を与え、楚文化の理想を求める精神とロマン的な雰囲気に対して肯定と称賛を与えている。彼らは「憤を發して書を著す」或いは「憤りを發して情を表出する」という理論を強調し、文学の心情表出の特徴を強調した。また、經学家の理性的な精神とは異なった審美的視点を示し、特異な光芒を放ったのである。劉安は道家の自然の道から出発し文芸を研究し、後人が文芸本体論の角度から理論的思弁をなすことに啓発を与えた。これは先秦道家文論の発展でもあったし、魏晉以後の玄学文芸思想への過度的で重要な橋梁でもあったのだ。その他、例えば桓譚や王充の反復古、新創作の文学思想は、後世晋朝の葛洪(283-363?)などの人々に影響が見られるし^{②⑪}、桓譚の「小説」に関する理論、及び王充の主張する口語と表記文字の同一性を求める文学上の言語観は、当時であって共に破天荒な主張だったのである。文論の自覚という天にもとどく大木は、魏晉南北朝時代に育ったものであるが、しかしその種は、両漢時代に早くも播かれていたのだった。よって、魏晉南北朝における文論の覚醒は表面的には両漢文論への反動に見えるけれども、実は両漢文論の継承と発展

なのだとすることができよう。

注

①文論上の争い：蒋凡氏は漢代を流れる文論上の主な議論として、屈原とその文学への評価、司馬遷と《史記》に関する評価、及び当時の現代文学にあたる漢賦の芸術的評価の三点を挙げ、それぞれの人物を個別に説明するときにも、主にこの視点から述べられている。なお《両漢文学批評史・緒論》（上）「二 思想文化と社会歴史背景」参照。

②劉向：前漢後期の経学家、目録家、文章家及び政治家。儒家の今文学派に属し、天命の叱責説を受けて、善をなすものに天は福を報い、不善をなすものには禍をもたらすと考えた。陰陽や災害奇事に託して人間世界の出来事を語った。これが彼の詩歌教化説を生み出す基礎となる。彼は過去の書籍を丁寧に校勘し、目録・提要の祖となる《別録》を作ったが書籍自体は滅び、現在では幾つかの書物についての校勘記録や提要がのこるばかり。本原書第二篇第一章第一節劉向参照。

讖緯儒学：図讖の预言を受けて後漢初代の皇帝となった光武帝が好み、儒学者は争って図讖を学んだが、図讖とはそもそも天からの预言とされるもので、前漢の天人感应説の流れにはあるものの、怪しげな説が共に語られた。緯とは経書の解釈書だが、怪しげな説が聖人に仮託して語られた。これをまとめて讖緯説という。

班固（A.D. 32-92）：讖緯説流行の中にあって、班固は正当な儒家思想を持ち、博学多才な歴史家であった。しかし、彼は天災や奇妙な出来事などを「天人感应説」、つまり天がその意志を人界に示したものだとして解釈しているし、その一方では、神仙鬼神を好むことを排している。蒋凡氏はそれを矛盾と見て当時の社会の複雑性から来るものだろうと述べる。第二篇両漢文学批評第二章第五節班固参照。

③老荘思想・諸子百家の影響について

劉向：《漢書・劉向伝》によると、方術を好んだ皇帝のために、劉向は幼い頃読んだ鍊金術の本を信じてその実行を申し出たが、結局黄金はできず虚偽申告の罪で危うく死刑になりかけている。

揚雄：《漢書・王貢兩龔鮑伝》によると、揚雄は若い頃嚴平君が成都で《老子》の講義をしていたとき、彼に従って学んでいる。

班固：《漢書・叙伝》によると、班固の叔父は老荘の学術を貴んだ事が示されており、

また《後漢書・班固伝》には、諸子百家の言をすべて極めたとある。

- ④《管子書録》《晏子叙録》：劉向が校定した管子・晏子の書籍につけられた編目と概要。書録・叙録の字は嚴可均の全漢文の記載による。
- ⑤《列女伝》：忠孝節義の倫理道德宣揚のために劉向が編集したもので、古代婦女子文学の資料をのこし、婦女文学の始まりと見られている。《列女伝》には詩が引用されているが、それは真情が心の中で発動して詩となるという劉向の文学論にもとづくものである。《説苑》は劉向が先秦及び漢代の書物から遺文逸事を採録したもの。
- ⑥《漢書・藝文志》：漢書につけられた当時の図書目録。劉向の《別録》を息子の劉歆が分類して《七略》とし、それをもとに班固が作ったもの。中には六芸略・諸子略・詩賦略・兵書略・数術略・方技略がある。「小説」は諸子略に、《楚辞》は詩賦略に入れられている。
- ⑦《漢書・地理志》：ここでは各地の地理と民情とがしばしば《詩経・国風》の詩の風格と関係づけて述べられる。例えば、鄭国については、土地が狭く切り立ち、山に住んで谷から水をくむ生活、男女がしばしば一緒にあつまるので、その風俗は淫靡であるとし、鄭詩に「東門を出ると、女性がうようよしている」と歌うとあるが、鄭風の詩がかく淫靡であるとされる原因はその風俗にあると考える。第二編第三章第五節班固参照。
- ⑧《両都賦序》と揚雄「辞賦雕虫篆刻」説：班固は、嘘の羅列には確かに批判的ではあったが、揚雄のような極端な否定には反対している。班固の賦観は《両都賦序》にみられ、賦を古詩の流れとして儒家伝統の中に組み入れ、その作用から地位の高さを訴えている。
- ⑨明道・徴聖・宗經三位一体説：揚雄は社会の根本原理である道は聖人の言葉によって語られ、その精華が五經であると考え。よって、道が明らかになるには、聖人の言葉によらねばならず、經典を模範とした文章造りに励むことになる。これは、六朝齊代劉勰『文心雕龍』で、明確な理論化が行われる。第二編第三章第二節揚雄参照。
- ⑩桓譚：桓譚の文論は主に《新論》(散逸)にみえ、文学の社会的な効用にその核心に置いたものとなっている。文章による褒貶によって、国家を興し治める任務を求める。よって、批判的な色彩が強くなるが、これは「聖人を否定し法を無視す」と評された思想と関係する。第二編第三章第三節桓譚参照。
- ⑪王充：王充は文学に描写の真实性と作者の認識の真理性の結合を求めて、勸善懲惡の社会作用を求めている。復古傾向に反対し独創の重視・言文一致など現代を重視する態度は特記されるべきだが、真实性の重視から、虚構や想像表現が批判の対象となってしまう

ている。しかし、讖緯神学の流行の時代には、現実的な意義があった。第二篇第三章第四節王充参照。

- ⑬鄭衛の新声・雅頌の古調、揚雄・宋弘の批判：桓譚は新しさを追求するところがあり、揚雄に浅はか者と称されているし、宋弘には訴えられかけている。鄭衛は《詩經》に淫だと批判されたものだけでなく、主には当時の民間に興っていた流行音楽をもさすもので、桓譚の現代性が窺われる。第二篇第三章第三節桓譚参照。

- ⑭「文は必ずや晦渋で深遠であれ」：經典の文を模範とせよと主張する揚雄は、聖人の文章經典が、難解で奥深いことが良いのだとして、自己の文章の言葉も難解で深遠なものとしたが、そもそも時代が違えば用語の解釈に困難がともなうのは必然であり、またその内容とも関係するもので、必ずしも難解であることが良いわけではなく、後世の批判をも招いている。第二篇第三章第二節揚雄参照。

- ⑮《山海經》：戦国時代から前漢初期のものとする地理書だが、原始的な神話や伝説の話も記載されている。しばしば儒家は怪しげな神話や巷の物語を遠ざける姿勢を持つが、劉歆の場合《山海經》には聖賢の記録がのこり、それが信じられるもののだとして、瑞祥や怪異現象を考えたり遠国異人の習俗を知るのに役に立つと高い評価を与えている。ただし、これは当時の儒家神学化の傾向と関連して考える必要がある。第二編第三章第一節劉向（付劉歆）参照。

- ⑯桓譚の小説観：桓譚の意識を分析すると小説は小さいながら内容が豊富なこと、比喩の方法で内容や感情を説明する手法があること。教化の社会的効用があることといった認識があった。第二篇第三章第三節桓譚参照。

- ⑰香草美人の比喩手法：王逸は《楚辞》を経学的立場から解釈しようとしたために、文辞に現れる事物に《詩經》解釈で用いられる比喩手法を応用し、善鳥や香草を忠臣正義の者の比喩、惡鳥臭物を讒言詔いの者の比喩とし、秀麗な美人を君主の比喩として解釈することになった。第二篇第四章第一節王逸参照。

- ⑱「六義」：《詩經》の中にあると言われる風・賦・比・興・雅・頌の六種のもので、これらの言葉自体は先秦からあるのだが、解釈は一致していない。鄭玄は賦を直接批判、比を類似の喩えでの風刺、善事をもって喩えて勧めることだと解釈する。第二編第二章第二節《毛詩序》及び三家詩論参照。

「正・變」：鄭玄は《詩經》の詩には時代の違いによって作品の風格内容の違いを説き、周初の太平な社会を称賛するのが正風・正雅であるとし、周が衰えて乱世となり怨恨風

刺の多くなったものが変風・変雅だと考えた。現実と文学の関係に対する視点がここには示されている。

- ①⑨本源論：鄭玄は、詩の起こりを《尚書・虞書》に「詩は志を言い、歌は言を永くす、声は永きに依り、律は声に和す」の語句のあるを以て詩の始まりを説く。そこには文学史的な視点がぼんやりとだけ見えている。第二編第四章第二節鄭玄参照。
- ②⑩「物感説」：《楽記》は前漢中頃儒家の音楽論をまとめたもの。音楽の誕生をといて、人の心から起こるものとし、その心の動きは周囲の現象・事物に感情が促されたものだと説く。そこから、悲しければ悲しい音が、うれしければうれしい音が出ると考える事になる。芸術一般に通じる理論として、《毛詩序》にも同様の視点がある。第二編第二章第一節《礼記・楽記》及びその他参照。
- ②⑪葛洪への王充の影響：葛洪の当時、古書がわかりにくいのは、才能が大きく思考の深い人物によって書かれているからだ、との説があったが、これに対して葛洪は王充同様の視点で批判を加え、わかり易くするため口語のように書を著すべきだと主張した。《魏晋南北朝文学批評史》第一編第四章東晋文学批評第一節葛洪参照。